



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	伊藤博明『ルネサンスの神秘思想』（講談社学術文庫、二〇一二年）
Author(s)	阿部, 包
Citation	基督教學, 48, 50-53
Issue Date	2013-07-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62410
Type	other
File Information	07abe.pdf



伊藤博明

『ルネサンスの神秘思想』 (講談社学術文庫、二〇一二年)

阿 部 包

本書は、絶版になっていた原著『神々の再生——ルネサンスの神秘思想』（東京書籍、一九九六年）を、今回副題を書名にして講談社学術文庫版として出版されたもので、一六年遅れで取り上げられることになった次第である。

著者が、「講談社学術文庫版によせて」で指摘しているとおり、「原著の刊行から十五年ほど」経った現在、この分野における必読文献のいくつかは邦訳で読むことができるようになったし、著者の編集責任になる『ルネサンス』（中央公論新社）『哲学の歴史』シリーズ第四巻、二〇〇七年）の恩恵に浴している読者も少なくないだろう。

ルネサンス研究者に要求されるものの一つに、古典古代Classical Antiquityと中世に対する原典に基づく該博な知識とそれらを比較検証する確かな眼がある。その片鱗はすでに著者の『ヘルメスとシビュラのイコノロジー——シエナ大聖堂舗床に見るルネサンス期イタリアのシンクレティズム研究』（ありな書房、一九九二年）に現れていたが、本書ではそれがより広い領域で縦横に駆使されている。

本書執筆の目的を著者は「十四世紀から十六世紀初頭までのイタリア思想を、フィレンツェのプラトン主義を中核におきながら、概括的に見通すこと」と述べ、その際、「主要な人物とテクストを選択し、そこに注意を集中させることにした。『神々は細部に宿りたまう』という金言を呟きつつ、「木を見て森を見ず」というのが、私の生来の傾向性であるが、あえて本書では常に森全体を念頭におき、目についた大木を手がかりに考察を進めたつもり」と謙虚に述懐している（あとがき参照）。だれも見過ごしかねない些細なエピソードにより大きな文化的・思想的転換点の刻印を読み取る著者の手腕

は、一四八四年四月一日（枝の主日）にローマに現れたラテン名ヨハネス・メルクリウス・デ・コリジオという預言者風の人物の解釈を介して、ルネサンスのフィレンツェにおける〈古代神学〉の復興とそれに伴う異教思想とキリスト教神学のシンクレティズムの実践を指摘して見せる「プロローグ ジョヴァンニ・ダ・コレッジョ、あるいは〈神々の再生〉」から早くも見事に發揮されている。

このプロローグとそれに対応する「エピローグ ジャンフランチェスコ・ピーコ、あるいは〈神々の黄昏〉」との間に、二部構成の本論が配されている。「第一部〈神々の再生〉の歴史」は、ペトラルカ（一三〇四年生まれ）からローマの枢機卿エジディオ・ダ・ヴィテルボ（一五三二年死去）までを「通時的に考察」したもの、「第二部〈神々の再生〉の諸相」は、「〈古代神学〉とオカルト学・神秘主義について主題ごとくに、共時的に論究」したものである。第一部、第二部にはそれぞれ四章が充てられ、前者は「第一章 蘇るオリュンポス神——詩の復興」、第二章 異教哲学の再生」、第三章 プラトン

主義とキリスト教」、「第四章 〈哲学的平和〉の夢」、続く後者は「第五章 エジプトの誘惑」、「第六章 〈古代神学〉と魔術」、「第七章 占星術と宮廷芸術」、「第八章 カバラの秘儀」となっている。内容紹介は、第一部を中心に行なう。

第一章は、ペトラルカを中心に展開する。それはスコラの空気が支配していた時代にあつて、彼こそ「〔自然〕の研究から〈人間本性〉の探求へと目を転じ」、その探求が『異教の哲学者』に学ぶことによって進められると考えた」からである。「詩人たちを決定的に退ける」トマスとは異なり、彼は異教の詩人たちの寓意の中にキリスト教的真理を見、「スコラの弁証論を論難して詩的雄弁を称揚した」結果、後の「ヒューマニズムの運動において、詩の寓意的解釈が確固たる地位を占めることになった」のである。ペトラルカによる「詩の復興」は、オリュンポスの神々の再生をもたらすことになるが、著者はそれをペトラルカの先駆者ムッサートをはじめ、ボッカッチョの『異教の神々の系譜』やサルターティの『ヘラクレスの功業について』を紹介しつつ跡づけてい

る。サルターティに極まるこの流れは、その寓意的解釈や秘儀的解釈によって異教の神々をキリスト教的真理を示す者として蘇らせたのである。

第二章は、異教哲学の再生を描く。中世はアリストテレス優位の時代であったが、プラトンを一層高く買うペトラルカのヒューマニズムの精神はフィレンツェに着実に根づいて行った。一四世紀末にフィレンツェで始まった本格的なギリシア語教授は、一五世紀にはプラトン復興となって結実する。その間の経緯を、著者はレオナルド・ブルーニ、ゲオルギオス・ゲミストス（プレトン）、ベツサリオンなど多様な人物の活動によって明らかにしているが、ベツサリオンによれば、キリスト教神学とプラトン哲学は寓意的解釈を介して一致するのである。

第三章が考察の対象とするのは、主としてマルシリオ・フィチーノである。著者は、『饗宴注解』、『プラトン神学』、『キリスト教について』などを縦横に援用しつつ、プラトン（古代神学）の集大成者でもある、新プラトン主義、偽ディオニュシオス、〈光の形而上学〉と連綿と受け継がれてきたいわゆるプラトン主義的伝統とキリスト

教とを調和させようとするフィチーノの姿を浮かび上がらせる。彼の愛の教説を視覚化したのが、ボッティチェリの《春》、《ウェヌスの誕生》であった。

第四章は、ピーコ・デッラ・ミランドラが追及した〈哲学的平和〉の思想が考察される。「調和の君主」ピーコは、イタリア・ルネサンスの掉尾を飾る天才哲学者である。彼は「彼の時代までに人類が産みだしてきた知的遺産を咀嚼して総合し、そこから新しい哲学を打ち立てる」ために討論会を企画したが、そこで議論に付そうとした論題が『九〇〇の論題』であり、討論会の開会の辞として用意されたのが『人間の尊厳についての演説』であった。特に後者は、「イタリア・ルネサンスの人間論を代表するもの」で、「最も著名な論考」である。しかし、時代は大きく変わっていた。時の教皇によって討論会は中止させられ『論題』は有罪とされた。ピーコが追及した〈哲学的平和〉は夢想に終わったのである。しかし、彼の夢は、ラファエッロの《アテナイの学堂》に具象化されている。

第二部こそ、もしかすると著者の独壇場で、第一部の考察に関わる様々な異教的主題——ヘルメス、ゾロアス

書
評

山我哲雄著

『海の奇蹟 モーセ五書論集』
(聖公会出版、二〇一二年)

古賀清敬

ター、オルフェウス、ピュタゴラス、ホロスコープ、占星術、カバラ、魔術など——を、シンクレティズムという時代背景のもとにフィチーノやピーコなどの解釈を交えて説明する。言わば再生した神々の百科全書という趣である。

エジローグは、ピーコの甥ジャンフランチェスコの思想と活動をとおして描かれたルネサンスの終焉である。

構成も堅固、木と森のバランスも中々に見事である。

山我哲雄氏はこれまで、旧約聖書学の重要な専門的著作を数多く翻訳して紹介し、他方、聖書やキリスト教について学問的な裏づけに基づくわかりやすい解説書を出して、日本社会にキリスト教の理解を広めるのに貢献してこられた。そのような著者のこれまでの聖書学的論文の中から、モーセ五書に関するものを集めたのが本書である。

では、難解な学術論文なのかというと、そうではない。なぜなら、そこで取り上げられている課題は、ごつごつした文章や重複した類似記事など、およそ聖書を読む人ならだれでも抱くような素朴な疑問だからである。それ